

資質・能力を育む 指導のPDCAサイクル

これからの学校教育には、自校の生徒にどのような資質・能力を育むのかを学校教育目標において明確化した上で、その達成に向け、学習指導要領等に基づいて教育課程を編成し、それを実施・評価して改善していくこと、すなわち、「カリキュラム・マネジメント」の実現が求められている。

その「カリキュラム・マネジメント」の側面の1つとして、「教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること」(*)が挙げられているように、新しい時代に必要となる資質・能力を生徒に育てていくには、そのための指導のPDCAサイクルを確立し、それを回していくことが重要だと言える。

今号はその視点で、資質・能力の育成とその指導のあり方について考えていく。

* 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」

Q これからの高校教育における新しい時代に必要となる資質・能力の育成に向けて、教育目標とその達成のために回される各教育活動での指導のPDCAサイクルは、どのようなものであればよいと考えますか。

- ◎ Pの段階を十分に考える時間が必要だと考える。 (東京都)
- ◎ 現状認識を教師も生徒も時間をかけて行うことが、実現可能な目標・プランの設定につながる。そのため、「診断的評価」「形成的評価」の役割が一層重要になるのではないかと考える。 (静岡県)
- ◎ Cの基準づくりが、最も大切だと思う。 (新潟県)
- ◎ Cにおいて、1人の教師だけでなく、教科内はもちろん、他教科の教師にも見てもらう必要がある。1つの授業に対して普段から観察し、研修する姿勢でいたい。 (静岡県)
- ◎ ルーブリックによる評価のあり方がポイントになると思う。ただ、「〇〇ができるようになる」という、ある意味可視化される評価項目とは異なるところにこそ、教育の神髄があるとも考えるので、冷静に対処し、スキルを磨いていきたい。 (滋賀県)
- ◎ コンテンツが先行した教科指導が多数を占めていたが、今後はコンピテンシーベースで計画を立てる必要がある。そうすると、必然的に「できたか」「できなかったか」の単純な評価はできなくなるため、評価の計画が必要となり、指導と評価の一体化が必然となる。Pの段階がサイクルの大部分を占め、準備がこれまで以上に重要になるだろう。ただ、Pの段階が十分に練られていれば、ほかのステップは順調に回せるのではないかと考える。 (静岡県)
- ◎ PとDの段階を並行して行うのがよいと考えている。詳細まで入念に決めた計画ではなく、軸となる方向性を確立し、それに沿って計画と実行を同時進行させ、そこから検証・改善をスピード感を持って行う。 (北海道)
- ◎ PDCAサイクル全体において、独り善がりにならず、教科間で互いに情報交換していく中から深化させていくべきだと思う。 (兵庫県)

本号のテーマ

これからの学校教育活動における
指導のPDCAサイクルのあり方と、その確立に必要な視点を考える

求められる「資質・能力を育む指導のPDCAサイクル」の確立

考察【P.4～7】

- ◎学校教育目標として具体的に育てたい生徒像を描いた上で、自校の現状を正しく認識し、それを学校教育目標から引き算することで、取り組むべき課題を見いだす。現状は、強みだけでなく、弱みも含めて認識することが重要であり、そのために、自校の弱みも自由に語り合える風土が校内に必要なことになる。
- ◎PDCAサイクルを回す上で大切なポイントは、様々な場面でチェックの機会を設け、振り返ること、そして、気づきをその都度言語化すること。
- ◎学期末・年度末の振り返りとは別に、時間をあまりかけず、簡単なものでよいので、小さな振り返りを意識的に行う。その際、教科や学年、分掌を超えて、振り返りの内容を共有することが大切。
- ◎評価は、生徒の現状を把握し、元気づけ、後押しすることにつながらなければならない。その観点から、自校で育成を目指す資質・能力の測定に適切なアセスメント・ツールを選択・活用する。
- ◎生徒と接する教師だからこそ分かる生徒の学びの現状を、たくさんの教師がそれぞれの視点で見取り、共有する。



大谷大学 教授
荒瀬克己



3校の事例に見る「資質・能力を育む指導のPDCAサイクル」

	事例1 千葉県立上総高校 【P.8～11】	事例2 大阪府教育センター 附属高校 【P.12～15】	事例3 熊本県立第二高校 【P.16～19】
Plan	◎教師によって解釈が異なっていた、育成を目指す資質・能力である「対話力」を具体的に定義。	◎既存の教育活動を4つに整理した「クローバープラン」の下、「メタ認知能力」と「自己調整能力」の育成を目指す。	◎熊本の創造的復興をリードする人材を育てるため、育成を目指す資質・能力を9つの要素から構成される3つの力に設定。
Do	◎「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、5つの授業の工夫ポイントに沿って指導改善を図る。	◎生徒に夏季休業中の実行計画を考えるワークシートなどを作成させてポートフォリオ化し、振り返りを行わせる。	◎理数科のみだった探究科目を普通科と美術科にも設定。全教科・科目で「ICEモデル」等を取り入れた探究型授業の開発に着手。
Check	◎教師が他の教師の授業を参観する機会を設け、指導改善状況を検証。同時に生徒の学習意識も調査。	◎ベネッセの「進路マップ」のアンケート項目に、メタ認知能力や自己調整能力に関する学校独自の質問を追加し、検証。	◎育成を目指す資質・能力を測る問題を作り、定期考査で出題。普段以上に真摯に思考し、考えを発展させる機会にさせる。
Action	◎教育目標の達成度の定量的な測定を強化するため、ベネッセの「基礎力診断テスト」を導入・実施。	◎生徒が自分で学びのPDCAサイクルを回せるよう、ベネッセの「スタディーサポート」を導入。教科指導では「ICEモデル」を活用。	◎生徒の学びの深まりを受け、普通科や美術科の各教科・科目でもルーブリックを作成し、それを活用した評価の実施を目指す。

これからの学校教育活動における指導のPDCAサイクルのあり方とは

はじめに

求められる「資質・能力を育む指導のPDCAサイクル」の確立

本誌は、生徒に育む資質・能力を学校教育目標として明確化し、その達成のための教育課程・指導計画の策定、それらに基づいた授業・指導実践、そしてその検証・評価から授業・指導改善を図る一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される営みを「学校教育デザイン」(図1)と名づけ、2017年6月号から12月号まで、それを描くための視点や考え方を特集記事で取り上げてきた。「学校教育デザイン」を描くことは、社会環境の変化や家庭・地域からの期待、そして自校が積み重ねてきた伝統を踏まえて、目の前の生徒の姿を見ながら、学校のあり方を更新していくものだ。そのため、学校教育目標への到達は一足飛びのものではなく、日々の授業やHR活動、部活動や学校行事が有機的に結びつき、さらに生徒の学習・生活状況調査や定期考査、模擬試験などの様々なアセスメントで成果や課題を精査し、教育活動を見直しながら、実現していくものである。すなわち、指導のPDCAサイクルを多角的に回すことが求められる。

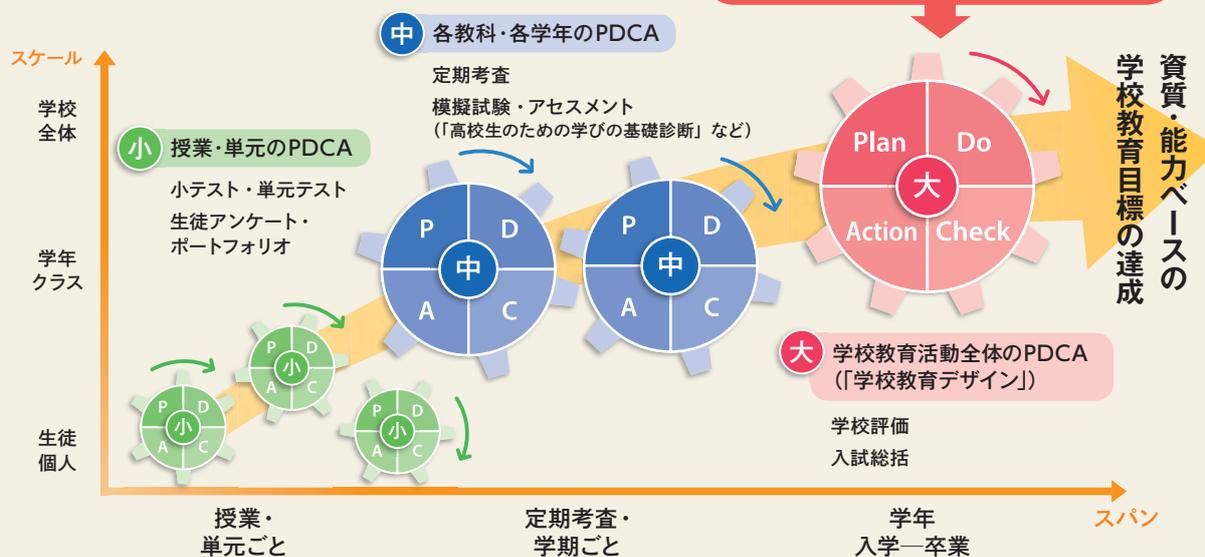
次ページからは、高校生の基礎学力の定着に向けたPDCAサイクルの構築を促進するため、19年度から各校で本格的な利活用が始まる「高校生のための学びの基礎診断」の検討ワーキング・グループの主査である荒瀬克己・大谷大学教授に、資質・能力を育む指導のPDCAサイクルのあり方について聞く。

図1 資質・能力の育成に向けた「学校教育デザイン」を描く営み



学校教育デザインを描くPDCAサイクルは、様々な教育活動により多角的に回っていく

図2 学校教育目標達成のPDCAサイクル



教師同士の語り合いを通じた振り返りとアセスメントで、生徒の背中を押す

荒瀬克己・大谷大学教授に聞く

自校の弱みも自由に語り合える風土が必要

内山 次期学習指導要領では、学習内容に加えて、それを学ぶことで「何ができるようになるか」という視点で、育成を目指す資質・能力を、「知

識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱で示しています。資質・能力を育成するために、今後、各校では、学校教育目標から教育課程・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証までの一連のサイクル



あらせ・かつみ 京都府・京都市立堀川高校校長、京都市教育委員会教育企画監を経て、2014年度から現職。中央教育審議会の各種委員、文部科学省「高大接続システム改革会議」の「多面的な評価検討ワーキング・グループ」主査、「高校生のための学びの基礎診断」の検討ワーキング・グループの主査等を歴任。

ルを、カリキュラム・マネジメントを通じて、各教師が実現していくことが求められます。まず、カリキュラム・マネジメントを推進する上で大切なことを教えてください。
荒瀬 カリキュラム・マネジメントを推進する上で、学校教育目標の設定がその出発点となります。どの学校も綱領や校訓を掲げていますが、より具体的に育てたい生徒像を描き、それを校内で共有することが重要です。この時、学校教育目標を掲げるだけでは、その達成のために具体的にどのようなことから取り組めばよいのか、すなわち、課題は見えてきません。大切なことは、自校の現状を正しく認識し、それを学校教育目標から引き算することです。そうして初めて取り組むべき課題が見

えてきます。ただし、現状は強みだけでなく、弱みも含めて認識することが重要です。そのため、自校の弱みも自由に語り合える風土が校内には必要になります。
内山 自校の強み、弱みを整理する際にも、育成を目指す資質・能力を意識して、生徒の様子を語り合うことが必要になってきますね。
荒瀬 授業、学校行事、HR活動など、様々な活動における生徒と学校組織の強みや弱みを語り、取り組むべき課題を教育活動ごとに洗い出していけるとよいですね。ただ、各教育活動における生徒の強みや弱みは、管理職よりも現場の教師の方がよく見えているものです。だからこそ、教科や分掌、教職歴にとらわれず、気づいたこと、感じたこと、そして疑問に思ったことを率直に言語化して共有できる風土が必要です。
以前、ある高校で「授業改善だより」を拝見した時、「本校の生徒に身につけてほしい主体性とはどのようなものか」と同僚間で問



「聞き手」
ベネッセコーポレーション
進研模試編集長
内山公宏 うちやま・きみひろ



い合うフリーズを見て、素晴らしいと思いました。高校生には主体性が必要だと誰もが言うけれど、では自校の生徒がどのような状態になったら主体性を獲得したと言えるのか、先生方は現状に即して問い直そうとしておられたわけです。目指す姿を具体的に共有するための、地に足のついた取り組みだと思いました。

小さな振り返りの機会を数多くつくる

内山 学校教育目標の達成のために、各教育活動の成果や課題を、学期や年度で検証していくことが重要になります。さらには、各教科・科目、各分野・単元、そして日々の各授業の検証も必要でしょう。つまり、大、中、小いろいろな規模のPDCAサイクルが存在し、それぞれが個別に回るのではなく、かみ合い、連動して回ることとで、学校教育目標の達成に向けた大きなPDCAサイクルが回るイメージです（P.4図2）。

荒瀬 PDCAサイクルを回す上で大切なことは、様々な場面でチェックの機会を設け、振り返ることです。PLANやDOの段階でも、「本当にこの計画がベストなのだろうか」「この取り組み方でよいのだろうか」とチェックすることが重要です。そし

て、気づいたことを、その都度言語化することが大切です。

内山 学期末や年度末だけでなく、もっと短期間でのチェックや振り返りが必要ということでしょうか。

荒瀬 途中で振り返ることで、現状を変えていくことができます。学期末・年度末の振り返りとは別に、小さな振り返りを意識的に行っていくことが大切だと思います。小さな振り返りであるわけですから、時間もあまりかけず、簡単なものでよいのです。その際に大切なのは、教科や学年、分掌を超えて、振り返りの内容を校内で共有することです。何を目的とした活動が、どのような成果を上げ、どのような課題が新たに見えてきたのかを、育成を目指す資質・能力を踏まえて語ることで、振り返りの言葉はすべての教師が理解できる共通言語になります。

内山 資質・能力を念頭に語り合うから、より分かり合えるのですね。

荒瀬 例えばある教科において、「難しい問題にも粘り強く向き合えるようになった」「予習にも取り組んでいる」「学んだことをクラスメイトと語り合っている」といった生徒の現状が見えたとなると、深い理解へ

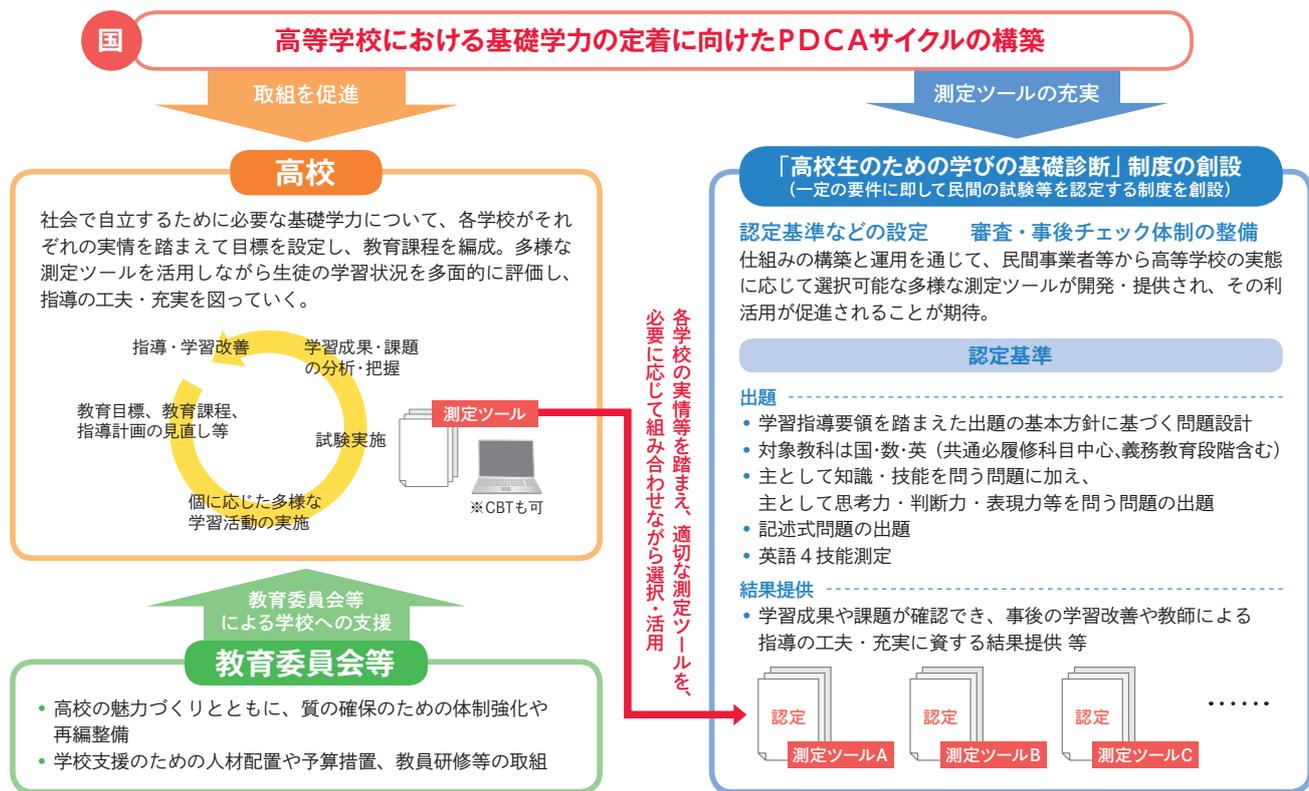
とつなげようとしている生徒の姿が浮かんできます。「では私の担当教科ではどうか」と振り返ることで、それぞれの担当教科の指導改善が進むはずです。それらがつながって、学校としてのPDCAサイクルを回すことができるでしょう。

生徒の背中を押すようなアセスメント活用を

内山 基礎学力の定着に向けた指導のPDCAサイクルを回す上で、活用が求められているのが「高校生のための学びの基礎診断」です（図3）。測定ツールとなる民間の試験等には、各校が生徒への育成を目指す資質・能力を踏まえて、生徒の学習状況を多面的に評価することで、指導の工夫・充実を図ったり、学校教育目標や学習到達目標を設定したり、見直したりすることができ、現場の課題に寄り添ったアセスメントであることが求められています。

荒瀬 利活用の前提として、私たちは、評価が何のために行われるのかを改めて考える必要があります。指導と評価の一体化といったことも含めてですが、学校で行う評価はつま

図3 「高校生のための学びの基礎診断」制度のイメージ



*文部科学省『「高校生のための学びの基礎診断」制度について』を基に編集部で作成。

るところ、生徒の現状を把握し、元気づけ、後押しすることにつながらなければなりません。その観点から、各校は、自校で育成を目指す資質・能力を測定するのにふさわしいツールを選択・活用することが大切です。そうした原点に立ち返って、「高校生のための学びの基礎診断」の利活用のあり方を検討していただきたいですし、さらに、生徒の日々の学びの様子など、「高校生のための学びの基礎診断」だけでは分からないことと、つまり、生徒と接する教師だからこそ分かる生徒の学びの現状を、たくさん教師がそれぞれの視点で見取り、共有していただきたいと思えます。私は、「この生徒は最近授業で積極的になつた」と語り合おうようになった」といった教師ならではの気づきも、生徒を評価するエビデンスの1つだと思えます。生徒からやる気を引き出すためには、生徒自身が気づいていない成長やよさを教師が気づかせることが重要であり、そうした教師のプロフェッショナルな感覚は、教育活動における有効な支援であり、そここそ評価です。そのような教師の感覚に基づいて、現

在検討中の「キャリア・パスポート」の活用で、生徒の「これから」に役立つ評価が可能になると思っています。既にそうした実践例は、「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」(※1)でも見られます。学校独自のアセスメントにおいても知識を土台にした資質・能力を測定し、その基準・規準を生徒にも明らかにすることで、生徒との信頼関係を築きながら、学習を支援することができるでしょう。

内山 私たちも、資質・能力を適切に測定できるアセスメントを追究し、先生方の指導改善に役立てるよう努力を続けたいと思います。

荒瀬 漢文の教材でも使う韓愈の『雜説』に、「千里の馬は常に有れども伯樂は常には有らず」という一文があります。「千里の馬」を生徒の資質・能力、「伯樂」をそれに気づいて引き出し伸ばす教師と読み替えると、「常には有らず」すなわち、気づける教師がいつもいるとは限らない、では悲しいですね。「高校生のための学びの基礎診断」などを利活用することで、私たちが、生徒の力をしっかりと見取れるよりよい目利きになれることを願っています。

*1 「高校生のための学びの基礎診断」の実施に向け、基礎学力の定着に向けた指導体制や教材開発とともに、生徒の基礎学力の定着度などを把握し、授業・指導改善に生かすためのテスト手法などについての研究開発を行う事業。18年度は17事業が採択された。

授業の工夫ポイントを共有することで指導改善を図り、目標の「対話力の伸長」を達成する

千葉県立上総高校は、2016年度から「対話力の伸長」を目標に掲げ、主体的・対話的で深い学びの視点からの指導改善を進めている。17年度には、授業の工夫ポイントを5つに整理して全校で共有。年2回の授業研究週間などを通して、指導改善のPDCAサイクルを回した。どの教科の授業においてもペアやグループでの学習、振り返りを実践してきた結果、生徒たちの対話力は着実に伸びてきている。

Plan

「対話力」を資質・能力の3つの柱に落とし込み、全校で共有

普通科と園芸科を有する千葉県立上総高校は、社会で活躍する生徒の育成に向け、生徒への育成を目指す資質・能力として「対話力の伸長」を掲げ、指導改善を進めている。同校では、卒業後、多くの生徒が地元就職することから、企業の採用面接はもちろん、就職後も、自分の考えや意見を自分の言葉で伝えることが必要になるためだ。主幹教諭で教務主任の糸川靖英先生はこう語る。

「2016年度に着任した現校長

が、対話力重視の教育方針を打ち出しました。生徒の進路を考えると、それは最も必要な資質・能力であり、誰もが納得できる教育目標でした。以前の本校は、生徒指導に重点が置かれていましたが、生徒が落ち着いてきたこともあり、指導を次の段階に移そうと、全校で『対話力の伸長』を目指した指導改善を始めました」

16年度は、糸川先生を中心に指導改善の方向性を模索。まず、生徒に学習の見通しを持たせることが大切だと考え、全教科・科目で授業冒頭に学習課題を板書するようにするとともに、教科を超えた互見授業を行い、指導の工夫などを学び合った。

全校に指導改善の意識が浸透してきた17年度は、教師によって解釈が異なっていた「対話力」を具体的に定義した。校長や教頭、糸川先生、教務部所属の教師4人による授業研究チームで議論し、学校としての対話力を、「相手の伝えたいことを正しく理解し、自分の考えを明確に述べ、説明する力」と定義。次期学習指導要領における資質・能力の3つの柱に、その定義を落とし込んだ(図1)。そして、学習指導要領改訂の方向性の1つである「どのように学ぶか」の視点に立ち、主体的・対話的で深い学びを通して、「何ができるようになるか」対話力の伸長」を

図ることを目指した。

なお、同年度から千葉県総合教育センターによる「これからの時代に求められる資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントに関する研究」子どもたちの主体的・対話的で深い学びを通して」の研究協力校となり、同センターの協力も得ることになった。

Do

協働学習や振り返りなどで授業に対話の場を設ける

指導改善の具現化に向け、授業研究チームは、主体的・対話的で深い

千葉県立上総高校

◎校訓は「誠実 進取 希望」。重点教育目標に「言語活動と体験活動を充実させ、生徒の対話力を伸ばす教育活動を展開する」などを掲げる。2年次にはインターンシップを実施。地域での清掃活動や地元の小中学生を招いた農業体験など、地域との交流にも力を入れる。

◎設立 1910（明治43）年

◎形態 全日制／普通科・園芸科／共学

◎生徒数 1学年約80人

◎2018年度進路実績（現役のみ）
4年制大は、清和、東京情報大、東京農業大、日本大に4人が合格。短大、専門学校進学14人。就職52人。

◎URL <https://www.chiba-c.ed.jp/kazusa-h/>



糸川靖英
千葉県立上総高校
教職歴9年。同校に赴任して6年目。主幹教諭。教務主任。理科（化学）。



池谷道雄
千葉県立上総高校教頭
教職歴33年。同校に赴任して1年目。

学びを具体化するための授業の工夫ポイントとして、①学習内容の明確化、②問いの工夫、③教材・教具の工夫、④指導方法の工夫、⑤内容の振り返りの5つを提示(図2)。チームのメンバーが各教科会に参加してその内容を説明し、メンバーの実践などを基に具体的な方法も示した。

糸川先生は、教務主任として率先して指導改善に努めた。担当する3

図1 上総高校が設定した資質・能力



* 学校資料を基に編集部で作成

図2 具体的な取り組み

- 1 学習内容の明確化
本時の目標を提示し、生徒が何を学習しているのかを明確にする

 - 2 問いの工夫
生徒が興味・関心を持つ問いかけ、思考・表現する問いかけ

 - 3 教材・教具の工夫
視覚に訴える教材など

 - 4 指導方法の工夫
ペア学習、グループ学習、先生役生徒の活用など

 - 5 内容の振り返り
発表、生徒相互確認、振り返りシートの活用など
- * 学校資料を基に編集部で作成

年生の化学の授業では、授業の流れを、①学び直し、②説明、③まとめ、④問題演習、⑤振り返りとして固定。授業冒頭には本時の目標を示し、生徒が目標と流れの両方の見通しを持って学べるようにした。そして、対話力を伸ばすために他者と話す場面をつくろうと、協働学習と振り返りを重視。問題演習では、生徒にとって難しい問題を出し、グループで取り組ませることを1年間継続した。

「グループで話し合わせると、私語が増えるのではないかという不安もありましたが、やってみないと始まりません。うまくいかない場面もありましたが、諦めずに毎回、協働学習を行いました」（糸川先生）

振り返りでは、「今日分かったこと」「今日学習したことが、社会で生かされている場面は？」の2点を書かせた。そして、生徒が提出した時に一読し、必ず声をかけた。例え

ば、単語しか書いていない生徒には、「これはどういう意味なの？」と問いかけ、自分の言葉で述べさせた。

3学期には、糸川先生が最初に手順を説明すると、後は生徒が自分たちだけで話し合いながら学習を進める場面が見られるようになった。

「進路決定後の3年生の授業では、例年生徒の集中力が途切れがちでしたが、その年の生徒たちが主体的・自立的に取り組む姿に、指導の手応

えを感じました。全校で方向性を共有したからこそ、授業だけでなく、学級経営でも対話力が重視され、落ち着いた学級づくりができたことが基盤にあると思います」（糸川先生）

振り返りでも、当初は糸川先生からの問いかけを嫌がった生徒もいたが、だんだん話すことに抵抗感がなくなつたと言う。

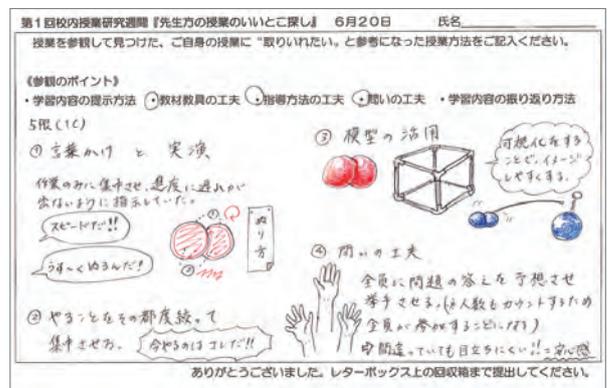
そうした生徒の変化は、生徒自身が学びのPDCAサイクルを回した結果だろう。例えば、生徒が書いた書類の文字が読みにくければ、「履歴書にもそんな字を書くの？」と提出時にすぐ指摘したり、授業中、根拠を示した発言をした時は、「面接でも、今のように根拠を示して言うといいね」と褒めたりしている。その場で生徒が自身の行動を振り返れるようにし、授業での学びが就職につながることを認識させている。

Check

授業改善の定着度と生徒の学習意欲を調査

6月と11月には各1週間、教師の空き時間に担当教科を超えて授業を参観する「校内授業研究週間」を实

図3 校内授業研究週間「先生方の授業のいいとこ探し」



施した。授業者は、授業の工夫ポイント（P.9 図2）に沿って授業づくりをし、参観者もその視点で授業を見て、「自分の授業に取り入れたい」と思った方法を「先生方の授業のいいとこ探し」シートに記入し、授業研究チームに提出。チームが、参観者が挙げた「いいとこ」を授業の工夫ポイントごとにまとめ（図3）、全教師に配布して工夫の仕方を共有するとともに、教師自身や教科会での振り返りに活用してもらった。

校内授業研究週間で、生徒に対する各授業のアンケートも実施。「本時の目標が提示されている」「振り

上は、校内授業研究週間で、授業を参観した教師が書いた授業の「いいとこ」。それらを基に、授業研究チームが各教科の授業の工夫をポスターにまとめ、教科を超えて指導の工夫を共有した。
*学校資料をそのまま掲載



返りが実施されている」など、質問項目を統一して、指導改善の状況を確認した。6月と11月の結果を比較すると、「1時間の流れが分かりやすい」という項目の肯定率が32ポイント上昇。また、11月のアンケートでは、「自分の考えや意見を述べたり説明したりすることによく取り組んだ」など、生徒の学習意欲も調査したところ、教え合いや対話に関する項目の肯定率が高かった（図4）。

「グループ学習を全教科が取り入れた成果が表れました。生徒も授業が変わってきていると実感し、一生懸命に取り組んでいることが分かり

ました」（糸川先生）

その流れをさらに推進しようと、12月、「教科として目標とする対話力」を各教科会で定義した。担当教科の授業で生徒が対話力を発揮している姿をイメージしてもらい、その姿を教科ごとにまとめ、それを目指した授業づくりをすることで授業改善がより図られることを期待した。

Action

アセスメントで対話力の定着を測り、指導改善に生かす

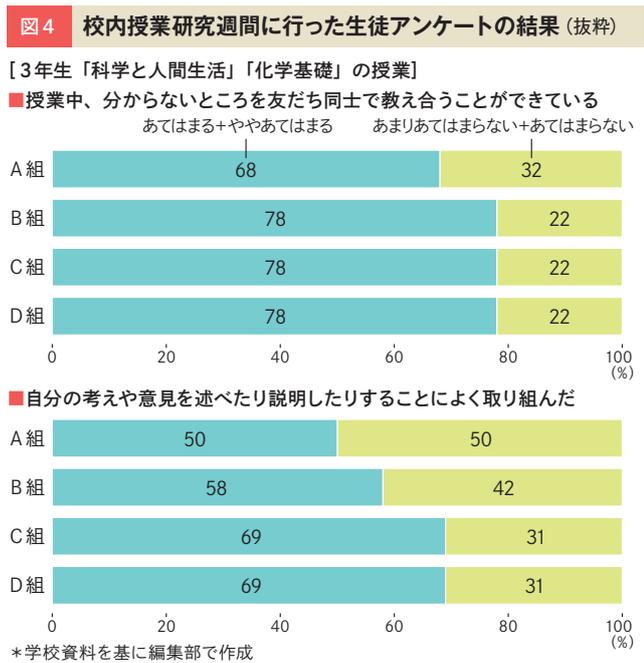
18年度に着任した池谷道雄^{いけや}教頭は、着任早々授業を見て、グループ学習が落ち着いて行われていることに指導改善の成果を感じたと語る。

「教職歴2年目の若手教師の授業

では、勉強があまり得意ではない生徒もグループで話し合っって課題に取り組んでいました。なかなか主体的に学習に向かえない生徒も、みんなで取り組むことによって、学習姿勢が変わるのだと実感しました」

ただ、今年度は多くの教師が異動したため、授業研究チームが各教科の教科会に参加し、目標と授業の工夫ポイントの共有から始めた。

*1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲の学び直し専用プリント教材。
*2 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。



「前年度にうまくいった方法が、今年度もうまくいくとは限りません。着任した先生方を含めて、全校で改めて指導改善の方向性を共有しました」(糸川先生)

授業づくりでは、学習内容の明確化と振り返りに焦点をあてた。前年度までの成果から、目標の立て方を「〇〇しよう」から「〇〇して、××を理解しよう」に変えた。

「習得だけで終わらず、活用までを目標としていることが、生徒に分かるようにしました」(糸川先生)

また、学び直しには数年前から

ネットセの「マナトレ」(*1)を活用して取り組んでおり、学力の定着度を測定するため、ベネッセの「基礎力診断テスト」(*2)を導入することにしました。「高校生のための学びの基礎診断」の運用開始に備えることも、ねらいの1つだ。

「このテストには、教科学力や進路意識とともに『自我同一性』(*3)を測る項目があり、社会度が高ければ『他人の意見を聞ける』、自我度が高ければ『自分の意見をはっきり言える』といったように、本校が育成を目指す対話力を測ることができる

ものでした。生徒の自我同一性の分布によって指導の方向性が明確になり、全教師で意識共有できると考え、全学年で年2回実施し、指導改善に生かすことにしました」(糸川先生)

5月に実施した「基礎力診断テスト」の結果を見ると、教科学力については、GTZ(*4)でD3だった生徒が各学年とも約6割いることが分かった。基礎学力の向上が課題であることを全校で共有すると、生徒に家庭学習習慣の定着を図ろうと宿題を課す教科も出てきた。また、「基礎力診断テスト」付属の事前学

習教材をどう活用するかも課題に上がり、県内の先進校の取り組みを参考に改善する予定だ。

自我同一性については、発達型や社会型の生徒が多いことから(図5)、今後の指導の方向性が見えてきた。

「他者の話を聞ける生徒が多いと分かり、今後重視すべきは、生徒が発言する機会を意図的につくることだと分かりました。課題は、途上型の生徒への指導です。社会性や自我の確立には自己肯定感も重要ですが、本校の生徒はなかなか自分に自信が持てません。教師が生徒にもっと声をかけ、先生は自分を見てくれていると、まずは安心感を持たせることが大切だと考えています」(池谷教頭)

外部講師による講演会では、講師に突然質問された3年生がしっかりと受け答えをするなど、授業以外の場面でも「対話力の伸長」が見られるようになった。

「我々が考える以上に速いスピードで社会は変化しており、生徒はその社会を生きていくことになりました。目の前の生徒に必要なであれば、新しい指導を取り入れて、生徒に社会で必要となる資質・能力を育んでいきたいと思っています」(池谷教頭)

*3 精神分析学者エリック・エリクソンが提唱した考え方。「基礎力診断テスト」では、自分のあり方に確信を持ち、自分の判断で行動でき、自分を主張していくという「自我確立度」と、社会の中で自分の役割を自覚して引き受けようとする「社会性確立度」から「自我同一性」を捉えている。
*4 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。

事例2 大阪府教育センター附属高校

メタ認知能力と自己調整能力の育成を目指し、振り返りを重視した指導を全校で実施

大阪府教育センター附属高校は、2017年度、「クローバープラン」で既存の教育活動を整理し、育成を目指す資質・能力を教員間で共有した。その中でもメタ認知能力と自己調整能力の育成に焦点をあて、ポートフォリオの活用や授業での振り返りを強化してきた。教科・科目を超えた授業研究などを進める過程で、学校教育活動全体のPDCAサイクルが回り始めている。

Plan

「クローバープラン」で育成を目指す資質・能力を共有

大阪府の教育を牽引するナビゲーションスクールとして2011年度に開校した大阪府教育センター附属高校は、大阪府教育センターの研究・研修機能と一体となった教育活動を展開する公立高校だ。開校以来、「変化の激しい社会の中で感性を豊かに、生き抜く子どもたちを育てる学校」を目指す学校像に掲げている。16年度には、文部科学省「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」（3年間）

の指定を受け、カリキュラム・マネジメントの実践、PDCAサイクルに基づいた学校改革に着手。各教科・科目で、パフォーマンス課題の実践やアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善などに取り組んだ。

17年度は、学校教育活動全体のPDCAサイクルの確立に動き出した。まず、教科・科目を超えて教育目標の共有を図るため、「クローバープラン」を作成した。それは、既存の教育活動を「確かな学力の育成」「探究力の育成」「キャリア教育の実践」「自己実現を叶える為のサポート」の4つに整理し、目指す学校像と照らし合わせて、それぞれの教育

活動で育成する資質・能力を示したものだ（図1）。その中で、特に育成を目指す資質・能力として掲げたのが、「メタ認知能力」と「自己調整能力」である。首席の田中昌一まさかず先生は次のように語る。

「生徒自身が目標を持ち、その実現に向かって努力する姿勢や力を育まない限り、基礎学力の定着や思考力等の育成は難しいでしょう。生徒が自分の学力を客観的に見て課題を把握し、自ら改善していく力を育むことが最大の目標だと捉えました」

その上で、カリキュラム・マネジメントについて理解を深めるためのワークショップを実施。学年団で

は「学年目標」と「育てたい力」を、各教科では「科目の目標、つきたい力」を設定し、全学年、全教科・科目を見通した「年間指導計画一覧表」を作成した。宮田早永子さよこ教頭は、その意義を次のように説明する。

「年間指導計画一覧表」により、時期ごとの各教科・科目の内容及び育成を目指す資質・能力が一覧で見られるようになりました。教科内での指導計画を立てる際も、他教科との連携を考えたり、重複している部分は精選したりと、他教科との連動を意識した計画の立案が可能になり、カリキュラム・マネジメントの第一歩となりました」



竹島貴之 たけしま・たかゆき
大阪府教育センター附属高校
教職歴4年。同校に赴任して5年目。3学年副担任。進路指導部。



太田圭輔 おおた・けいすけ
大阪府教育センター附属高校
教職歴8年。同校に赴任して2年目。1学年担任。進路指導部。



酒井将平 さかい・しょうへい
大阪府教育センター附属高校
教職歴9年。同校に赴任して3年目。探究科主任。総務企画部。



池田 径 いけだ・けい
大阪府教育センター附属高校
教職歴12年。同校に赴任して2年目。指導教諭。生徒指導部。



田中昌一 たなか・まさかず
大阪府教育センター附属高校
教職歴34年。同校に赴任して8年目。首席。



宮田早永子 みやた・さえこ
大阪府教育センター附属高校教頭
教職歴26年。同校に赴任して10年目。

メタ認知能力と自己調整能力の育成に向けて始めたのが、1年生を対象としたポートフォリオの活用だ。

ポートフォリオを活用した振り返りにより見通しを持たせる

0

新入生オリエンテーションで、将来の目標を見据えて今、何をすべきかを考える自己調整が重要になることを伝え、「クローバープラン」の内容とポートフォリオの意義を説明。学習や行事の活動記録、模擬試験の帳票などをクリアファイルに蓄積させるようにした。

その一例は、「クローバープラン『夏休み実行計画』」だ。夏季休業前に4つのプランそれぞれの計画を立てさせ、夏季休業後にその計画の振り返りをさせた。また、年度末には、4つのプランごとに1年間を振り返り、できたこととできなかったこと、それぞれのプロセスとその結果、そして次年度に向けた目標とその達成

大阪府教育センター附属高校

- ◎大阪府立大和川高校を改編して開校。「共に学び、共に敬い、共に高まる」をスローガンに掲げ、新たな学びの創造を目指す。アクティブ・ラーニングや探究学習などを通して、PISA型学力の育成を図る。
- ◎設立 2011(平成23)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2018年度入試合格実績(現浪計)
京都外国語大、立命館大、龍谷大、追手門学院大、大阪経済大、大阪電気通信大、関西外国語大、関西大、近畿大、摂南大、桃山学院大、関西学院大、甲南大、神戸学院大などに延べ144人が合格。
- ◎URL <http://www.osaka-c.ed.jp/partner/>

に向けた方策を考えさせた(P.14 図2)。田中先生はこう語る。

「生徒は、活動を振り返り、その内容をメタ認知することができれば、自分で見通しを立て、前に進めるで

図1 「クローバープラン」

確かな学力の育成

- 全教科で取り組む授業研究・授業改善(ICEモデルの実践) パフォーマンス課題、ルーブリックの活用、思考力・判断力を育みつつ、基礎学力の定着を図る。(ICT活用、アクティブ・ラーニング)
- 学びの基礎診断等を活用したPDCAサイクルの確立 生徒 計画を立てながら学習する。テストの結果を振り返り修正する。
教員 観点別学習状況評価に基づくシラバスによる授業の実施。
- カリキュラム・マネジメントの実践(コア) 教育課程実施計画、シラバスの検証を行い改善する。(カリキュラム面の関連性、マネジメント面の協働性)

探究力の育成

- コミュニケーション能力の育成(チームで働く) 職業調べ、商品開発、演劇プログラム等を通して聴く、話す、協働する等の力をつける。
- 社会とつながる力の育成(考え抜く) 文化研究やフィールドワークを通して、かかわる、計画する、多面的・多角的に考える等の力をつける。
- 未来を拓く力の育成(前に踏み出す) 個人、グループによる課題研究を通して、企画する、望ましい解決をめざす、発信する、進路を切り拓く等の力をつける。
「探究ナビ」を教科横断型の教科として、研究・実践を行う

キャリア教育の実践

仕事・社会へのトランジション

- 3年間を通した進路指導計画の実践 進路HR、進路行事、探究ナビとの連携、高大連携、外部人材の活用等。
- ガイダンス機能を充実させ、自ら学ぶ生徒を育成 教務部と進路指導部、学年が連携した選択指導、社会とのつながりを意識させる授業の実践。(外部機関との連携、パフォーマンス課題)
メタ認知能力を伸ばし、自己調整型の主体的な学習ができる工夫の実践。
- 進路希望実現に結びつく学力の育成 目標を持って主体的に学習する力を育成する進路指導。

自己実現を叶える為のサポート

- 行事・部活動、生徒会、ボランティア等の特別活動を通しての人間力の育成 自主的な活動計画、リーダーシップ、チームワーク等。
- 人権教育を基盤とした生徒指導 他者への思いやり、基本的な生活習慣の確立。
- 読書活動の充実 図書室の充実により、読解力育成の基礎固め、知識を広げ、教養を深める。

ほかに、生徒向けに4つの学習で何を行うかをまとめた「クローバープラン」も作成し、生徒に配布した。

*学校資料を基に編集部で作成

しよう。ポートフォリオは主体性の育成にもつながると考えました」
ポートフォリオの導入は、教員が振り返りの大切さを再認識する契機にもなったと、指導教諭の池田径先

生は指摘する。

「本校には、ナビゲーションスクールとして、まずはやってみようという意識が教員間に根づいています。教育活動の綿密な効果検証は手薄になりがちでした。ポートフォリオの作成は、振り返りの重要性を認識する大きなきっかけになりました」

田中先生は、担当する「数学Ⅰ」の授業で最初に、単元の指導計画が

図2 「夏休み実行計画」と「1学年末の振り返り」のワークシート

夏休み実行計画 *学校資料をそのまま掲載

(※)夏休みに入るに当たり、「A」「B」「C」「D」の各学びに、必ず生徒記入して下さい。
夏休みの終わりに、振り返って、実際に出来た事を記載し記入して下さい。あるいは感想は記載していませんが、得意なことを取り込んだ事で、その成長を「A」～「D」のいずれかに分類できる場合は、それぞれで記載し記入して下さい。

	夏休み前の計画	夏休みの振り返り
(A) 授業の学び、学力向上の取組み		
(B) 探究的な学び		
(C) 道徳学習、将来の目標に向けた取組み		
(D) 部活動、行事等における学び		

A(授業の学び・学力向上の取組み) 1学年末の振り返り

授業による成果、授業おける成果(レポート・プロジェクト、作文コンクール等) 実力テストや(学びの基礎診断)における成果、英検、数検、漢検等の成果

(※) 出来た事、出来なかった事、どういふプロセスでそれが出来たのか、なぜ出来なかったのか、次年度はどうしたいか、どうすれば、それが可能になるのか、考えて書いてみよう。

1年 組 番 名前

(※) B、C、Dの学びについて、2週間の振り返り書きをさせ、提出

(※) その他
・学習日録の動に使用したワークシートをタリアーノファイルに保存
・メタ認知を養成する際、各々の学習をタリアーノファイルに保存
・年間を通して、各々が4つの学びの成果をタリアーノファイルに保存

(※) 8月28日(月)始業式の日には、この用紙を担任の先生へ提出
帰郷の成果物(またはコピー等)は、タリアーノファイルのタリアーノ
1年()組()番 名前

掲載され、「要点・発見・課題」の観点で振り返りを書き込めるワークシート(図3)を配布し、生徒が見直しを持って授業に臨めるようにするとともに、毎時間振り返りを行わせるようにした。そして、単元の最後には、日常の問題を授業で学んだ数学的な知識・技能を用いて解決するパフォーマンス課題を出し、その結果をルーブリックで評価した。

図3 「学びの地図」(単元計画表)「数学Ⅰ」2次不等式

①学びの地図(2次不等式の解法) (※)このプリントは、2次不等式が終わるまで、毎時間持つてくる事。最後に提出してもらいます。

修正版 1年 組 番 氏名

学習項目	目標(評価規準)	自己評価 A B C D	各時間の学習振り返り(記述して下さい)				学習の振り返り				
			今日の学習内容 (ポイント)は、何で したか?	毎日、1番難しい事 は、何でしたか?	毎日、得意問題のほた たは解けたらどう 思うか?	毎日、得意問題のほた たは解けたらどう 思うか?	毎日 得意 問題 のほ たは 解 け た ら ど う 思 う か?	毎日 得意 問題 のほ たは 解 け た ら ど う 思 う か?			
グラフを使った2次不等式の解法	数直線のグラフを利用して2次不等式の解を求めることができる。										
2次不等式の解法(1)	・因数分解して、2次不等式を解くことができる。 ・数直線を利用して、2次不等式を解くことができる。										
2次不等式の解法(2)	・2次不等式が2文字で表される2次不等式を解くことができる。 ・D<0になる2次不等式を解くことができる。										
2次不等式の解法(3)	・D<0になる2次不等式を解くことができる。										
2次不等式の解法(4)	・D>0、D=0、D<0のそれぞれの場合を整理する。 ・2次不等式が3文字で表される2次不等式を解くことができる。										
連立不等式	・連立不等式を解くことができる。 ・1行で表された不等式から連立不等式を導き、それを解くことができる。										

*学校資料をそのまま掲載

「学期の最初にはメタ認知能力の重要性を説明し、定期考査の振り返りの際にも『メタ認知能力を発揮できたかどうか』を3段階で振り返らせました。ワークシートの記述を見ると、生徒は、目標を持ってパフォーマンス課題まで取り組んでいましたが、メタ認知的な問いかけをして考えるまでには至っていませんでした」(田中先生)

Check

教科を超えた授業研究で指導の強み・弱みを述べ合う

評価指標の1つには、ベネッセの「進路マップ」(*1)を活用した。GTZ(*2)で学習到達度を測るとともに、「進路マップ」のアンケート項目にメタ認知能力や自己調整能力に関する学校独自の質問を加えた。その結果を見ると、メタ認知能力や自己調整能力の指導は、まだ全体には効果が表れていないと捉えている(図4)。さらに、1学期末と2学期末に実施した授業アンケートの結果では、「生徒の取り組み」「生徒の意識」「社会への関心や貢献」「他者と協働的に学ぶこと」に関する項目で前向きな変化が表れていた。ただ、そこでもメタ認知能力と自己調整能力には課題が見られた。

16年度から進めるパフォーマンス課題の実践とアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善に向けては、6月と11月に「授業研究月間」を設けた。まず、6月は全教科で互見授業を実施。各教科でテーマを設けて授業を行い、参観者は、「授業観察シート」に、目標に対する指導

*1 ベネッセが提供する、生徒の「なりたい自分さがし」と「なりたい自分づくり」をサポートする教材(適性検査、学力テストなどがある)。
*2 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。

法の適切さ、生徒の学びの成立、参観者自身の学びについて記入し、それらの内容を教科内で総括した。

11月には、全教科の互見授業に加え、各教科で研究授業を実施。さらに、数学・理科・英語が授業を公開して全体研究授業を開催。全教員がいずれかの授業を参観、または授業の録画を視聴し、11月末の全体研修会では、参観した教科ごとのグループになり、指導案やパフォーマンス課題、評価方法などについて話し合った。そこでは、「導入や目標が明確だった」「抽象的な数学が具体的に

確だった」「導入や目標が明確だった」「抽象的な数学が具体的に

に理解できた」「メタ認知能力の育成の観点が弱い印象を受けた」など、活発に意見が交わされた。3学年副担任の竹島貴之先生はこう語る。

「教科を超えた研修会では、専門外の視点からの指摘が有効でした。教科担当が見逃ししやすい改善点を把握できました」

Action

共通理解が進んだ今、全校でのPDCAサイクル構築を目指す

それらの検証を踏まえ、生徒が自分で学びのPDCAサイクルを着実に回せるよう、18年度はベネッセの「スタディーサポート」を導入した。1学年担任の太田圭輔先生は次のように説明する。

「生徒は、模擬試験の結果に一喜一憂するだけで、学習の振り返りを十分にできていませんでした。『スタディーサポート』の帳票には結果が詳細に示されているので、自己調整能力の育成に効果があると考えました。実際、面談の様子などから、自分で弱点を把握し、克服しようとする生徒が増えていると感じます」

き続き活用し、1年生でも活用を始めた。『JAPAN e-Portfolio』（*3）の活用も視野に入れ、より効果的な活用方法を探っている。

教科指導においては、ルーブリックの質の改善を図ろうと、「ICEモデル」（*4）の活用を始めた。既に学校設定科目の「探究ナビ」では、生徒に自身の活動を振り返らせ、どの段階の学びが達成できているのか「ICERulerブリック」で測っていた。

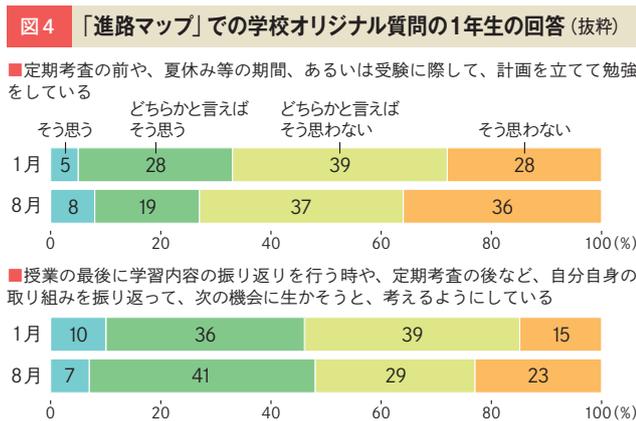
「探究ナビ」は1〜3年次で系統的に教科横断型の探究学習を行う科目で、学年団の多くの教員がかかわる。同科目で「ICEモデル」を活用したことにより、その有効性が浸透し、教科指導での導入となった。探究科主任の酒井将平先生はこう語る。「『ICEモデル』でこれまでの授業を整理すると、どのような取り組みで、どういった資質・能力を育もうとしているのかが見えてきました。学びの質に着目した授業設計は、汎用性が高く、全教科の共通言語になるのではないかと考え、教科指導でも活用することになりました」

そこで、18年度初めに全教員が参加する校内研修を実施し、改めて「ICEモデル」の共通理解を図り、各教科の状況に合わせて導入することとした。例えば、英語科では、定期考査後に「ICERulerブリック」を取り入れた振り返りを行い、生徒が自身の理解度をメタ認知できるようにした。また、「数学I」では、「ICEモデル」を取り入れた授業を行い、前年度の取り組みに加え、単元の最後に自分で連立不等式の文章問題をつくるパフォーマンス課題を行った。

「今年度は『文章を読んで連立不等式をつくることのできた』という生徒が、前年度の14%から45%に増加しました。生徒は深く考えることを経験し、1次不等式の単元の理解が進んだのだと思います」（田中先生）

今後は、個々の教育活動で回されているPDCAサイクルを連動させ、学校教育目標の達成のための大きなPDCAサイクルを構築することが課題だ。

『クローバープラン』『探究ナビ』『ICEモデル』などを通して教員間の共通理解が進んだ今こそ、さらに大きなPDCAサイクルを確立する好機だと捉えています。教科を超えて議論を加速させ、生徒の資質・能力の育成に焦点をあてた指導を追求したいと思います」（酒井先生）



*3 文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業（主体性等分野）で構築・運営する、高校eポートフォリオ、大学出願ポータルサイト。
 *4 カナダで開発された学習と評価のモデルのこと。Ideas（習得）、Connections（活用）、Extensions（探究）の3つの段階で学びの質の変容を捉える。

育成を目指す資質・能力を可視化しながら、探究科目と探究型授業を全校展開する

熊本県立第二高校は、探究学習の充実を図る中で生徒の資質・能力の育成に力を注いできた。近年は、その研究と実践を通して構築したPDCAサイクルを各教科の授業に応用し、授業改善に精力的に取り組んでいる。

Plan

創造的復興に貢献する人材に必要な資質・能力を設定

熊本県立第二高校は、2016年4月に発生した熊本地震で、校舎が甚大な被害を受けた。現在も復旧工事が続く中、教師の心の支えになっているのが生徒の前向きな姿だ。SSH（*1）部長の福田秀夫先生は、ボランティア活動でリーダーシップを発揮しながら、避難所で勉強を重ね、「地震で倒れない建物を作る」という夢を持って大学進学したある生徒と、第二高校が育成を目指す生徒の資質・能力を重ねる。

「これまで本校では、資質・能力の育成をベースとした教育活動に力を入れてきました。地震後の大変な状況の中、自分が興味・関心のある分野で力を発揮し、困難を乗り越えようとする生徒たちが見られたことで、本校の指導の方向性は間違っていないかったと確信しました」

同校では17年度より、科学的視点から熊本の創造的復興をリードする人材を育てるため、育成を目指す資質・能力を、「みつめる力」「きわめる力」「つなげる力」の3つと、それぞれを構成する9つの力に設定した（図1）。

「週1回の頻度で1年間、SSH

部を中心とした教師が、本校の生徒の強みや課題、育てたい力を徹底的に議論しました」（福田先生）

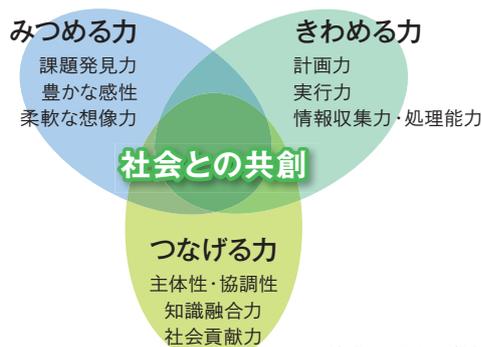
「みつめる力」「きわめる力」「つなげる力」を全生徒に育成するため、これまで理数科にしかなかった探究科目を普通科と美術科にも設置。さらに、全教科・科目における探究型授業の開発に着手した。

Do

学びの質を深めるための授業モデルを可視化

普通科と美術科の探究科目は、17年度、1年生を対象にスタートした。

図1 熊本県立第二高校が育成を目指す資質・能力



*学校資料を基に編集部で作成

普通科では、興味・関心のある課題について、解決の見通しを仮説として立てる「未来新聞」を作成した上で、その課題についての「ミニター

*1 文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール。



熊本県立第二高校
教職歴20年。同校に赴任して6年目。SSH部。授業開発部。美術科。



熊本県立第二高校
教職歴26年。同校に赴任して9年目。SSH部。授業開発部。家庭科。



熊本県立第二高校
教職歴21年。同校に赴任して9年目。SSH部長。理科化学。



熊本県立第二高校
教職歴34年。同校に赴任して6年目。授業開発部長。国語科。



熊本県立第二高校教頭
教職歴30年。同校に赴任して3年目。

熊本県立第二高校

- ◎創立の精神は「自主積極・謙恥自尊・礼節協調」。県下唯一の美術科を有する。熊本地震の被災後は、全学科で「くまもと地域復興論」を設置するなど、「創造的復興」に向けた教育にも力を注ぐ。
- ◎設立 1962（昭和37）年
- ◎形態 全日制／普通科、理数科、美術科／共学
- ◎生徒数 1学年約400人
- ◎2018年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、東北大、筑波大、東京藝術大、九州大、熊本大などに281人が合格。私立大は、多摩美術大、武蔵野美術大、明治大、早稲田大、関西学院大などに延べ394人が合格。
- ◎URL <http://shigo.ed.jp/daini/>

図2 授業改善のための工夫の見せどころシート（国語・西阪理恵先生）

KUMAMOTO DAI-2 Super Science Highschool 2017		授業開発部・SSH部
授業改善のための工夫の見せどころシート		
教科 国語 氏名 西阪理恵		
授業実施日：平成29年10月24日		
本時の見せどころは・・・ 鹿相如の、国家の危急を優先して私を従にする思慮 深さなどのような問答の中で明らかになっていく。		
視点	科目・研修名	古典
出入口	1 生徒・受講者	① 所属 普通科3年3組 ② 人数 38人（男子19人、女子19人） ③ 漢文に慣れ親しみ、協力して読み味わおうとする雰囲気がある。
	2 授業・研修の位置づけ	以前学んでいたことで、知らないことと困ることは何ですか？ 『史記』廉頗藺相如列伝 完璧帰趙
方法・内容	3 本時の内容と具体的方法（C/Eの問い、指導方法、展開）	① 題材『史記』廉頗藺相如列伝 刎頸之交 ② C/Eの問い「真の友情とはいかにして結ばれるのか？」 ③ 方法 講義 □演習 □グループワーク □実演 □実習 ④ ICT 実物投影機 □タブレット □ ⑤ 単元計画 (1) 第一段落の読解 藺相如の性格によって廉頗が受けた侮辱感。 (2) 第二段落～第三段落の読解 廉頗の言動に対する藺相如の対応。 (3) 第三段落の読解（本時） 藺相如が客人に語った真意。 (4) 第二段落の読解とまとめ 廉頗と藺相如が刎頸之交を結ぶまでの経緯。
	4 教員の評価の方法	①方法 □小テスト、□定期考査、□レポート、□シート提出、□実技テスト ②IC/Eに当てはめると？ □Ideas（知識、技能の習得）： 『史記』および司馬遷に関する知識、白文で読めるまでの音読の徹底 □Connections（既知の知識・概念や他領域とのリンク）： 語彙・文法の知識を活用して内容を読解し、各登場人物の言動および関係の変化を理解する □Extensions（応用、活用）：
生徒の自己評価	5 科目や学校全体の教育目標との一致	みつめる力 ★★★ きわめる力 ★★★ つなげる力 ☆☆☆
	6 生徒のリフレクション	登場人物の言動を正しく読み取り、そこから心情の変化を辿ることができたか？ ストーリーを楽しむことができたか？
継続	7 IC/Eモデルに当てはめると	□Ideas（知識、技能の習得）： 作品および作者に関する知識は身についたか？ 白文で読めるか？ □Connections（既知の知識・概念や他領域とのリンク）： 語彙・文法の知識を活用して内容を正確に読解できたか？ □Extensions（応用、活用）： 思想や立場の違いを乗り越えた真の友情を、自分の人生においても実現させるために、自分はどうあるべきかを考察を深めることができたか？
	8 教員のリフレクション	『史記』を代表する列伝の、人物描写・ストーリー展開の面白さを生徒に味わわせることができたか？
	9 IDモデルに当てはめると？	ARCSモデル

* 学校資料をそのまま掲載

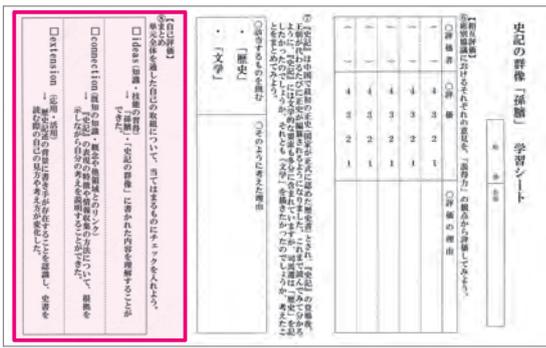
「マ研究」を行うなどした。「ミニテーパー研究」では、「災害と防災」「被災した商店街のリニューアル」など、熊本地震の経験を生かした課題設定も多く見られたと言う。また、美術科では、マーケティング能力や企画力などの育成を図ることを目的に、熊本市動植物園と連携して「動植物園を楽しむアプリ」を考案したり、防災リュックの開発に取り組んだりした。SSH部の染森千佳先生は、「普通科、美術科の探究学習で大切

にしたのは、科学的思考のフレーム作り」と説明する。「『みつめる力』『きわめる力』『つなげる力』の観点で生徒が探究学習を自己評価できるように、ルーブリックを作成しました。生徒は自己評価の過程で、問題解決やデザインにおいて科学的思考が必要なことを理解し、大学進学など高校卒業後の学びへの意欲につながっています」

全教科・科目における探究型授業の開発に向けた具体的な取り組みの1つが「授業改善のための工夫の見せどころシート」（以下、「見せどころシート」）（図2）の作成だ。「見せどころシート」には、インスタラクションナルデザイン（*2）、ICEModel（*3）、ICTの視点が取り入れられている。ICEモデルは、理数科の学校設定科目「科学家庭」において、生徒の自己評価、他者評価の視点として運用していたが、SSH部の田尻美千子先生が他教科でも適用できるのではないかとSSH

*2 教育活動の効果と効率、魅力を高めるための手法として集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学習支援環境を構築するプロセスの総称。
*3 カナダで開発された学習と評価のモデルのこと。Ideas（基礎知識）、Connections（つながり）、Extensions（応用）の3段階で学びの質の変容を捉える。第二高校はICEモデルを踏まえて、学びの段階を「習得」「活用」「探究」と設定した。

図3 「史記の群像『孫臏』学習シート」(国語、高濱俊彦先生)



*学校資料を基に編集部で作成

部に提案したことから発展し、全教科・科目における探究型授業の開発手法として採用された。

「単元の内容とICEモデルで示される『習得』『活用』『探究』の学びの質の3段階、そして第二高校として育成を目指す資質・能力を意識する授業改善の仕組みをつくること

が、資質・能力ベースの授業改善につながると思えました」(田尻先生)当初、「見せどころシート」に対して懐疑的な声も聞かれたが、実践を通して前向きに捉える教師が増え

ていったと、進路指導主事の高濱俊彦先生は振り返る。

「『見せどころシート』を基に授業を行いました。生徒の反応がよいことに驚きました。生徒にとっては授業の到達点に分かるだけでなく、自分の見方や考え方がどう変化してきたかが捉えやすかったようです」

教師の授業づくりの意識を大きく変化させるきっかけになったと、国語科の西阪理恵先生は話す。

「これまでは経験を基に無意識に指導していたことが可視化され、『自分はこの意図で授業を組み立てていたのか』と改めて確認できました。1コマの授業のあり方だけではなく、3年間を通して何を指すのか、指導はどうあるべきかということも深く考えて授業を構成するようになりました」

ベテラン教師の授業づくりの観点

が共有できるといふ利点も大きいと、教頭の吉永武幸先生は説明する。

「これらのフレームやモデルは汎用性が高く、ベテラン教師の経験が細分化、具体化されるため、若手にとって大変参考になるものです。それにより、学校全体の授業力の底上げにもつながっています」

「見せどころシート」作成を契機に、授業を通して生徒の思考をどこ

図4 理科の実験実習におけるルーブリック

目指す資質・能力	評価の観点	I (習得)	C (活用)	E (探究)
みつめる力	1 実験の目的【課題発見力】	教科書や資料集等の記述通りに記されている	教科書の内容と関連させ深められた内容が加筆されている	教科書等より深めた事項に加え、独自の課題を設定している
	2 考察【豊かな感性、柔軟な想像力】	結果から具体的に原因を考察している	結果から多角的に原因を考察している	原因が多角的に考察され、課題と展望が明確に示されている
きわめる力	1 実験に用いた道具や試薬、実験手法【計画力、実行力】	教科書や資料集等の内容が記述されている	教科書の正確な記述に加え、独自の材料を用いている	教科書の正確な記述に加え、独自の材料を複数用いている
	2 実験結果【情報収集力】	自分の班の実験結果を正確に記述している	他班(またはほかの班員)の実験結果も記述している	他班(またはほかの班員)の実験結果を記述し、自分の結果と比較している
	3 レポートのレイアウト【計画力】	簡潔な文章でまとめている	簡潔な文章に加え、写真や図、グラフなどを使用している	文章や写真、グラフなどのバランスがよく分かりやすくまとめられている
	4 引用・参照した文章等【情報収集力】	引用・参考文献等の情報が正確に記されている	本文中の適切な場所で文献が引用されている	複数の文献を引用し、自分の実験内容と比較している
つなげる力	1 実験の原理【知識融合力】	原理に関する簡単な記述がある	図や化学式などを用いて分かりやすくまとめている	身近な自然現象との関連が含まれている
	2 実験手法の理解・習得【知識融合力】	教科書や資料集などの手法は理解している	実験手法を十分に理解・習得し、滞りなく実験を進めることができる	教科書などの基本的な実験手法に加え、内容に創意工夫が見られる
ICE小計		8点	8点	8点
評価合計		24点		

*学校資料を基に編集部で作成

まで発展させるかが明確になった。例えば、現代文の『舞姫』の単元では、内容理解をベースに知識を習得、活用させながら、さらに「自分ならどう考えるか」「現代と比べ、当時の生きやすさや生きづらさをどう捉えるか」といった探究的な問いを生徒に与え、思考を深めさせていく。あくまでも『舞姫』を材料として、自分の内面、そして社会、世界といっ

た外の世界に思考を展開させていくわけだ。

高濱先生は、「生徒は、授業での学びを土台に新たな考えを創造したり、提案したりする楽しさに気づくと、あらゆる教科を学ぶ意味を理解するようになる」と話す。そうした気づきを促すために、高濱先生は授業を通じて生徒が自分にとってどのような学びがあったかをICEモデルに基

づいて振り返らせた(図3)。また、17年度は理科の実験実習において、ルーブリック(図4)が作成され、各教科・科目において生徒が学びを俯瞰するツールが開発されていった。

Check

資質・能力を測る問題を
定期考査に盛り込む

授業改善による生徒の変化・成長を測るため、定期考査も進化させている。従来はどの教科も知識の習得・活用の度合いを測る問題で構成していたが、徐々に育成を目指す資質・能力を測る問題を出すようになっていった。例えば、家庭科では、おせち料理のよさを後輩に伝える紹介記事を書かせる問題を出した(図5)。

「消えつつある文化の継承者の一人として、自分にできることを考えてほしい」と思い、出題しました。生徒は普段以上に真摯に思考し、考えを発展させるよい機会になっていきます(田尻先生)

定期考査に加え、今後は模擬試験などのアセスメントも、資質・能力の育成に向けて有効に活用していきたい

たいと考えている。

「模擬試験の個人成績を丁寧に分析することで、育成を目指す資質・能力がどのレベルで身についているのかを生徒に意識させ、さらに私たち教師が授業とのつながりを持たせながら、生徒の弱点を強化していきたいと考えています(染森先生)」

Action

生徒の学びの深まりを
ルーブリック改訂につなげる

探究学習に端を発する指導変革を通し、生徒の姿が着実に変容していることを同校の教師たちは感じ取っている。特に、自ら思考したり、主体的に参加したりする姿が、授業内外で多く見られるようになった。

ある日、進路室の高濱先生のところに8人の生徒が連れ立って訪れた。生徒たちは教科書にあった哲学者の文章について時間をかけて議論したが、どうしても分からないことがあり、質問に来たと言う。

「教師に質問する前に、まず自分たちで問いを立て、解決しよう」と試みたことが素晴らしいと思います。そこで、私の前で議論を再現さ

せながら、『そこでは、こんな考え方はできない?』『こうも書かれてるよ』などと思いのヒントを与えました。生徒たちは意欲的に発言し、自ら考え議論して深める楽しさを実感しようです」

「見せどころシート」の作成などをきっかけに、教師が、「習得」「活用」を土台とした「探究」レベルの問いをこれまで以上に大切にするようになったことで、相乗効果のように生徒からの授業中の質問も「探究」的なものへと深まっている。そのため、

探究学習などで運用しているルーブリックも、生徒の実態に合わせて柔軟に変えている。さらに今後、普通科や美術科の各教科・科目でもルーブリックの作成を目指している。

一方で、教師たちは目先の成果を求めない姿勢で生徒に接している。「生徒が自ら目標を持ち、自己を振り返ることで、大学、そして社会でも伸びていくサイクルを、それぞれの内面につくれるように、私たちは指導力を高めながら生徒を支えていきたいと思っています(吉永教頭)」

図5 定期考査問題(家庭科、田尻美千子先生)

家庭基礎(1学年3学期・学年末)定期考査問題(抜粋)

単元	食生活		
出題意図(レベル)	C(知識の活用)レベル、E(探究)レベル		
問題	<p>(1)「和食」はユネスコ無形文化遺産に登録されました。HPでも公開されている政府が挙げた登録・申請の特徴は下記の4点です。</p> <ol style="list-style-type: none"> 多様で新鮮な食材とその持ち味の尊重 栄養バランスに優れた健康的な食生活 自然の美しさや季節の移ろいの表現 年中行事との密接なかわり <p>そこで特におせち料理について考えた場合、何が目的で登録されたかを考え、あなたができることは何でしょうか? 具体的に何をどうするかについて2点、文章で解答してください。</p> <p>(2)冬休みに取り組んだ各自の「おせち料理」を、後輩が来年課題に取り組む時に「やってみよう」という気持ちになるような紹介記事を書いてください。やってみようと思うためには、料理名や食材名、調理法は必要ですね。</p>		
採点基準(配点)	(1) 配点小計8点		
	何を(2点×2)	どうするか(2点×2)	0点
	特徴4点に関連している *毎年のおせち料理作りを *習ったおせち料理の作り方を *他の行事食を など	具体的である *一緒に作る *聞いたことをノートに記録する *誰かに教える など	不十分 自分事となっていない
	(2) 配点5点		
	5点	各1点(満点3点)	0点
	記事として成立している 読んでいてワクワクする	成り立っている <input type="checkbox"/> 料理名 <input type="checkbox"/> 食材名 <input type="checkbox"/> 調理法	不十分 趣旨に合っていない

*学校資料を基に編集部で作成